

藝林史評 ⑤

象徴天皇の重要な「まつりごと」

今上陛下（満七十五歳）は、皇后陛下（七十四歳）と共に、この四月十日、大婚五十年を迎えられた。まことにおめでたいことで、国民の一人として心よりお慶びを申し上げたい。ただ、周知のとおり、天皇陛下は六年前から癌の手術に伴う治療を続けておられ、皇后陛下も昨年末から胃腸炎などを患っておられる。

そこで、宮内庁は今年一月二十九日「今後の御公務及び宮中祭祀の進め方について」と題する見解を公表した。それによれば、現在の御公務は、昭和天皇の七十歳代半ば（昭和五十年ころ）と比較べて、「外国賓客や駐日大使との御会見、御引見等」が約一・六倍、「赴任大使や帰朝大使との拝謁等」が約四・六倍、「都内や地方へのお出まし」が約二・三倍に増加し、「勳章等受章者との拝謁」が春も秋も七〜八日間に及ぶ。そのため、今年から「御負担の軽減」を段々と具体化されることになったのである。

それは「年間三十数回の祭儀」も対象になるが、「宮中祭祀は、御公務と並ぶ、大変に重要なお務めである、という両陛下のお気持ち」を十分に踏まえ、…所要の調整・見直しを行う」という。これをみても、両陛下が「宮中祭祀」をいわゆる「御公務」（国事行為・象徴行為）と並ぶ「大変に重要なお務め」と考えておられること、むしろ祭祀も公務も一体の「まつりごと」として務め続けておられることが確認されよう。

このような御認識・御精励は、歴代天皇の多くに見られるが、とりわけ先帝昭和天皇は「宮中祭祀に熱心」であられた。その事実に着目したのが原武史氏（明治学院大学教授）著『昭和天皇』

（二〇〇八年一月刊、岩波新書）である。しかし、本書には誤解と偏見が甚だしく、どうしても黙過するわけにいかない。

原氏によれば、宮中祭祀は「新嘗祭を除くほとんどが…：明治になってつくられたもの」であり、それゆえ「京都に強い郷愁を抱いていた明治天皇は、…：東京で宮中祭祀という『にせの伝統』が創られてゆくことに對して、どこかしら冷めた感情を持っていたように思われる」（二五頁）と勝手に憶測する。

それに対して昭和天皇は、「真実神ヲ敬セザレバ必ず神罰アルベシ」と信ずる母後の貞明皇后に感化され、戦争中（昭和十七年十二月）「天皇はひそかに、伊勢神宮に戦勝祈願の参拝をした」「天皇が最後まで固執したのは、皇祖神アマテラスから受け継がれてきた『三種の神器』を死守することであって、国民の生命を救うことは二の次であった」（二・八二・一四七頁）と断定する。

このような記述には、それを裏付けると思わせる論拠もあてがあるが、そこに意図的な作為がみられる。たとえば、葦津珍彦氏の「天皇は…：罪と過ちのあることをおそれて、常に御精進なさり、神に接近すべく努力される」（「神聖をもとめる心」という一般論を引いた上で、それを利用して、「葦津の言葉を借りれば、昭和天皇はアマテラスに戦勝を祈ってしまった『罪と過ち』を深く認識するがゆえに、戦後も『御精進』を重ね…：た」（一七五頁）と強引に解釈しているが、これは葦津氏の論旨にも昭和天皇の御真意にも全く反するであらう。

これでは御践祚以来「昭和天皇の御心を心として」こられた今上陛下の「お務め」がもつ意味も、到底わかるはずがない。ちなみに、近刊の拙著『天皇の「まつりごと」―象徴としての祭祀と公務―』（NHK出版・生活人新書）は、この課題に関する私なりの理解を精一杯まとめたものである。

〔所 功〕